

# セラム島のクスクス猟

—インドネシア東部島嶼地域の慣習的な森林利用と管理—

笹岡正俊

## 1. はじめに

はじめてクスクスを食べたのは、インドネシア東部セラム島の奥地、マヌセラ村だった。1998年の9月、私はこの村にひと月ばかり住み込んでいた。お世話になった村人の家でほぼ連日のように食卓に出てきたのが、サゴ料理パペダ（サゴヤシから取り出した澱粉を熱して葛餅のようにしたもの）とクスクスのスープだった。

「クスクス」はアボリジニの言葉で「悪臭」を意味し、鼻を突く独特の臭いがある。そのため、香辛料といっしょに煮込んでスープにする。これにカボスの酸味を加えてパペダと食べるのだが、かなり美味である。クスクスの肉は柔らかく鶏肉に近い。脂身はなく淡白な味だ。

村人はキツネザルのようなこの奇妙な動物を、「森で手にいれることのできる最も大切な食べ物だ」という。政府は保護動物に指定しているが、村人はそんなことはおかまいなしに猟を続けている。しかし、クスクスを根絶やしにするような乱暴な猟は行っていない。クスクスは、独自の知恵と技術によって、それなりの方法で管理されているのである。

## 2. サシ (Sasi) …慣習法に根ざした掟

そもそも私がセラム島のマヌセラ村に向かったのは、クスクスを食べるためではなかった。「森のサシ」について調べるためだった。

インドネシア東部マルク州にはサシと呼ばれる慣習法に根ざした掟があることで知られている。セラム島の南東部、バンダ海の東の端に浮かぶケイ・ブッ

---

Masatoshi Sasaoka : Cuscus Hunting in Seram Island—Customary Forest Utilization and Management in East Indonesia—

東京大学大学院農学生命科学研究科

サール島の慣習法長ラハイル氏によると、サシとは「一定期間特定の天然資源を採取したり破壊したりすることを禁止し、資源利用の持続性を守り将来の収穫の増大を保障する禁制」(Rahail, 1995)であるとされている。

資源利用を規制するためのこうした掟の内容は村ごとに様々である。最も一般的なのは村の地先の海におけるナマコ・ハクチョウガイ・タカセガイなどの採取を一定期間禁止するもので、マルク州の全域で見られる。また、海の資源以外にも、ゴクラクチョウの集まる木やイワツバメ

が巣をかける洞窟への進入などが規制の対象になっている (Monk *et al.*, 1997)。

既に何人かの研究者がサシに関する調査を行なっている。しかし、これまでなされた調査の多くは海の資源を対象にしたものばかりで、森の資源を対象にしたサシについてはほとんど知られていない。

マヌセラ村を調査の場所として選んだのは、そこがマルク州のなかでもまとまった熱帯林の広がるセラム島の最奥地の村であり、森に強く依存して暮らす人々による森のサシに出会えるかもしれない、そう考えたからだった。

### 3. マヌセラ村へ



図1 インドネシア国マルク諸島のセラム島調査地

マヌセラ村はセラム島のほぼ中央、3,000 m級の山々が連なるムルケレ山系の麓にある。人口337人、約50世帯の小さな村だ。村へは、北海岸からは2泊3日、南海岸からは1泊2日をかけて森のなかの小道をひたすら歩いて行かねばならない。

まず、マヌセラ村の真南にある海辺の村、モソに船外モーター付きのカヌーで向かった。漁民の家に一晚お世話になり、次の日の早朝、道案内をしてくれたモソの村人と共に森のなかを進んだ。途中森のなかで1泊野営し、2日目の昼まえにマヌセラ村を見下ろすことのできる峠にたどり着いた。峠の下に見える盆地には途切れることなく熱帯林が広がっている。ちょうど盆地の底に、森が刈り払われて小さな穴の開いた場所が見える。それがマヌセラ村だった。

村にたどり着いたのは夕方だった。途方もなく遠い道のりである。村人はこの道を歩いて、ジャガイモ・ラッカセイなどの農産物やオウムを海辺の村に売りに行き、それによって得たわずかな現金で塩やココヤシ油などの生活必需品を買っている。

#### 4. サゴヤシに支えられた暮し

森のなかの湿地帯には立派なサゴヤシの林が点在している。村人はここでサゴヤシを切り倒し、幹から掻き出した髓を水で洗って澱粉(サゴ)を採取する。これで冒頭に述べたサゴ料理パベダを作る。村人は、イモやバナナそして様々な野菜が植えられた移動耕作も行なっているが、暮しを支えているのはなんといってもサゴだ。村のおばさんに協力を得て毎日の食事の内容を調べたところ、約7割の頻度でパベダが食卓に上っていた。サゴはまさに主食なのである。



写真1 セラム島の最奥地に位置するマヌセラ村。サゴヤシの葉で葺いた家々が立ち並ぶ。

サゴヤシの栽培は植栽してから伐採までほとんど手をかけない点に特徴がある。植栽は適当な場所を整地してサゴヤシの側枝を突き刺すだけの簡単なものだ。最も集約的に労働力が投下されるのは、伐採から澱粉を取り出すまでの一連の「サゴ洗い」の作業と澱粉を村に持ちかえるまでの運搬作業のみである。

しかし、あまり人の手をかけ

なくても極めて多くの収穫が得られる。マルク州では良好な生育条件の下で、1本のサゴヤシから湿重量で約200kgのサゴが採取できるといわれている。1世帯当り（世帯構成員を4～5人として）の1週間のサゴ消費量が20kgといわれているので、1本のサゴヤシから1世帯の約2カ月半分の食糧が得られることになる（Monk *et al.*, 1997）。

サゴヤシは異常乾燥などの気候変動に強く、病害虫の被害にも強い。また、サゴヤシは特定の季節に結実する他の栽培作物と異なり、10～15年生の開花前の株であればいつでも収穫できる。そのため、様々な年齢の株から構成されているサゴヤシ林は「生きた食糧貯蔵庫」と呼べるものである。サゴヤシ栽培という「木の農業」は我々にはあまりなじみのないものだが、粗放な労働にも関わらず長期安定的に豊かな収穫を得ることのできる、優れた営みなのである。

## 5. クスクスを常食とする人々

しかし、サゴヤシにも問題がないわけではない。サゴはほぼ純粋な澱粉質からなる。蛋白質の含量は米の約10分の1、小麦だと20分の1しかない。そのため、サゴに強く依存する社会では、不足しがちな蛋白質を補うため、狩猟や漁猟が重要な役割を果たしている。市場との結びつきが弱く山奥にあるマヌセラ村では、市場で肉や魚を買ったり海で漁を行ったりすることができない。サゴに依存した村のそれなりに豊かな暮らしは、森での狩猟によって支えられているのである。

狩猟の主な獲物はクスクスである。クスクスはスラウェシからニューギニア、オーストラリア、タスマニアに分布する樹上棲の有袋類である。約150年前、オランダ領東インド諸島（現在のインドネシア）を旅した博物学者ウォーレスは、クスクスに関する次のような記述を残している。

「仕事をようやく片付けて夜の支度をしていると、地元の人が撃った一匹の



写真 2 軒先に飼われるオウム。これらのオウムはいずれ海辺の村で売られる運命にある。セラム島の山地民にとってオウムは貴重な現金収入源である。



写真 3 罾にかかったハイイロクスクス。樹冠部の接していない二本の樹木の間にくスクスの通り道となる棒を渡し、その上に罾を設置する。

奇妙なけものが持ち込まれた。(中略)それはぜひ毛皮を手にいれたいと思っていたパプア地域の風変わりな有袋類の一種、ブチクスクスであった。持ち主たちがそれを食べたいというので、私はかなりよい値をつけて肉は全部渡すと約束したのだが、彼らはぐずぐずしてなかなか帰ろうとしない。その理由に察しがついた私は、もう夜だったがすぐに処理して肉を渡そうと申し出ると、案の定、彼

らは承知した。(中略)一時間ばかりかかって肉を所有者に渡すと、その場で切り刻み、あぶって夕食にしてしまった」(ウォーレス：新妻訳1993)。

地元の人々がクスクスの肉を好んで食していたことが窺える。イスラム教の影響を強く受けた海岸部の村にはクスクスを食べる習慣はない。しかし、奥深い森のなかに暮すマヌセラ村の人々はウォーレスが出会った人々と同じように、クスクスを好んで食べている。クスクス猟はロタンで作ったソヘと呼ばれる巧妙な罾を用いて行なわれる。ソヘはクスクスの通り道にしかけられたわか状の絞め罾だ。ロタンの先には重石として太い木の枝や大きな石が結わえられており、これがぶら下がった状態で止め木で固定されている。クスクスは夜になると木の葉を食べに枝から枝へと渡り歩く。その時、このわかをくぐると止め木が外れて重石が下に落ち、ロタンによって絞めつけられたクスクスは身動きが取れなくなる仕組みとなっている。

村人はこの罾を森の一定区画に集中的にしかけ、数日おきにみまわりにゆく。クスクスの他に、シカやイノシシも罾猟の対象になっている。しかしクスクスのようには頻繁に獲ることはできない。罾を見まわりに行くと、クスクスだけは必ずかかっているという。村人はほぼ毎日のようにクスクスを食べている。サゴと同時にクスクスがなければ村のくらしは成り立たないといっ

## 6. 慣習法に基づく独自の森林資源管理

ところで、マルク諸島中央部および東南部では、村の慣習的占有地をペトゥ

アナン (petuanan) と呼ぶ。これはいわば村の領地であり、よそ者は勝手に利用できない。

マヌセラ村のペトゥアナンは、さらに尾根・小川・山道などを境界にして、氏族集団が保有する森 (氏族共有林) と、世帯が保有する森 (世帯保有林) にさらに細かく区分されている。ここでいう氏族共有林には、近縁の複数世帯の共同保有から氏族を構成する全世帯の共同保有まで、様々な規模の共有集団の森が含まれている。なお、氏族共有林も世帯保有林も、その利用権は父系を通じて相続される。

区分された森のすべてに、その土地にちなんだ名前がつけられている。例えばヒリリ・クレクレ (Hilili kule-kule) と呼ばれる森があるが、「ヒリリ」は木の名、「クレクレ」は「たくさんの木の洞」という意味を持つ。おそらく、マヌセラ村にはこのように区分された森が少なくとも 200 カ所はある。畷はこの森を単位にしかけられている。

それぞれの森に特定の保有者が決められているとはいっても、実際の森の利用は排他的なものではない。自分の森でなくとも、持ち主に断りをいれば畷を仕掛けることができる。聞き取りを行なった世帯の約 7 割が狩猟を行っていたが、そのうちの約 4 割は自分の森があるにもかかわらず他人の森に畷を仕掛けていた。このようにマヌセラ村の森の利用は持ち主以外の利用を排除するようなものではなく私的な所有の概念は非常に曖昧である。事実上、森は共同利用されているといつてよい。

また興味深いのは、約 3 割の世帯が狩猟を全く行っていないことである。これらの世帯は狩猟を行っていない他の世帯の分配によって肉を得ている。私が村に滞在中も、隣近所におすそ分けするために肉を運んでいる女性を何度も目撃した。森を利用する権利だけでなく、森から得られた恵みも村人のあいだで分かち合っているのである。

さて、森へのアクセスが保有者以外の者にかなり開かれているとはいっても、いつでも自由に猟をおこなってよい、というわけでは



写真 4 セリ・カイトフの儀式を行う村人。タバコ、キンマ、ピンロンジュを供えて、祖霊にお祈りを捧げる。

ない。森の共同利用は、セリ・カイツフ (Seli Kaitahu) と呼ばれる掟によって厳しくコントロールされているのである。

すでに述べたようにマルク諸島にはサシと呼ばれる資源利用規制がある。マカッサル・マレー語を語源とする「サシ」という言葉は、資源利用を律する禁制を表す一般名称としてマルク諸島全域で広く用いられているが、マヌセラ村ではこれを「セリ」としている。一方、「カイツフ」とは森を表している。したがって、「セリ・カイツフ」とは森の利用を律する慣習法に根ざした掟を意味している。

村人はクスクスの糞が見られなくなったり、罾にクスクスがかからなくなったら、その森にセリ・カイツフをかけ、森の恵みが豊かに回復するまでそこで狩猟を禁止する。氏族共有林、世帯保有林のどちらもが、セリ・カイツフの対象になっている。この禁制を実施する権限を握っているのは、その森の保有者（氏族共有林であれば共有集団の長）である。すでに述べたように、森に成立する保有権は、他者の利用を排除するような性格のものではない。この点をふまえると、「森の保有権」は、実質的には「森を管理する権利」くらいに理解したほうがいいのかもかもしれない。

セリ・カイツフをかけるには、まず森にしかけてあった罾を全て取り外さねばならない。その後、二本の棒を平行に立てその上にロタンの若い葉をのせた標識を森の中に立てる。その下にはタバコ、ピンロウジュの実（ヤシの一種で興奮性の麻酔作用のある嗜好品）、キンマ（噛みタバコの一種でピンロウジュの実とともに噛む）を供えて、祖先の霊にお祈りをささげる。このお祈りのなかで、セリ・カイツフの実施者は、祖先の霊にしばらく森を休めることを告げるとともに、つぎに猟を再開するまでのあいだクスクスなどの森の恵みが豊かに回復するようにお願いするのである。

こうしてお祈りのあげられた森はその森の保有者も含めて誰も利用することができない。もしもこの禁制に違反すると、「イノシシに襲われたり、蛇に噛まれる」などの災厄に見まわると信じられている。セリ・カイツフが持つ霊的な力への畏れは非常に強い。この禁制に違反するものなどいないと、村人は口をそろえて断言した。セリ・カイツフは、クスクスの数が増えてきた頃を見計らって解かれる。私が村に滞在した時点では、約8割の森の利用がセリ・カイツフによって禁じられていた。

## 7. おわりに

セラム島にはハイイロクスクス (*Phalanger Orientalis*) とブチクスクス (*Phalanger maculatus*) の2種類が棲息している。そのどちらもが、林業大臣決定 (Keputusan Menteri Kehutanan 301/Kpts-II/1991) によって保護動物に指定されている。また、マヌセラ村から約4kmのところにはマヌセラ国立公園が設定されており、公園内ではクスクスをはじめとして全ての狩猟が禁じられている (しかし、予算不足と人員不足で取り締まりはほとんど行なわれていないのだが)。

国の公的な法制度に照らしてみると、村人の暮らしは違法行為によって成り立っているといえる。しかし、クスクスの森の狩人たちは、むやみやたらに狩を行なっているわけではない。暮しに欠くことのできない重要な資源を、独自の方法で管理しているのである。

国家中心主義的なパラダイムに支配されたこれまでの一元的な森林政策は、こうした地域に内在する独自の森林利用・管理システム、すなわち「慣習共同体林業 (Sistem Hutan Kerakyatan : SHK)」とは相容れないものだった (Moniaga, 1998)。スハルトの新秩序体制が崩壊し、森林分野でもレフォルマンシ (改革) の気運が高まっている。改革期の森林政策に望まれるのは、そこに暮らす人々の慣習的森林利用・管理権を認め、「慣習法共同体林業」を維持・発展させて行くことを可能にする、多元的な管理制度の構築であろう。

昨年、インドネシアでは新しく林業法 (Undang-undang Nomor 41 Tahun 1999 Tentang Kehutanan) が制定された。しかし、ELSAM (市民による調査とアドボカシー機関) など多くの NGO は、旧法である林業基本法 (Undang-undang Nomor 5 Tahun 1967 tentang Ketentuan-ketentuan Pokok Kehutanan) と大きな違いが見られないとして、この法律に批判的である。新法の改革も含めて、多元的な森林管理制度の構築にむけた議論が必要とされている。

〔引用文献〕 1) A.R. ウォーレス著、新妻昭夫訳 (1993) マレー諸島 下巻、ちくま学芸文庫、東京、580 pp. 2) Moniaga, S. (1998) Advocating for Community-Based Forest Management in Indonesia's Outer Islands: Political and Legal Constraints and Opportunities. IGES International Workshop on Forest Conservation Strategies for the Asia and Pacific Region 21-23 July, 1998 : 120-132. 3) Monk, K.A., Yance, D. F and Reksodiharjo, L.G. (1997) The Ecology of Nusa Tenggara & Maluku. Periplus Editions. Singapore. 966 pp. 4) Rahail, J.P. (1995) Batbatang Fitra Fitnangan-Tata Guna Tanah dan Laut Tradisional Kei. Yayasan Sejati. Jakarta. 62 pp.